すべての道はHomeへ通ず

――アナット・リトゥイン
アーティスト＆HomeBase Project 創設ディレクター

イスラエル／テルアビブから さいたま市へ

2015年10月29日に故郷であるテルアビブを出発し、途中イスタンブールで乗り換えをして、約20時間の長いフライトを経て成田空港に到着した。夜遅くに到着したため成田のホテルで一夜を過ごしながら、私は自分の身体に時差と中東から更に東の場所へ来たという感覚を掴ませようとした。私はコンビニでスープを買い、ホテルの部屋で食べた。香り、音、味などをこの東の間の中継地点で味わいながら、出発してきた家とこれから待ち受けている生活のことを考えた。

翌朝、さいたま市へ向かうバスに大きなスーツケースを3つ抱えて乗り込んだ。約2時間の道のりの間、景色は住宅が密集した地帯に緑の農地が点在し始めた。
そして、さいたま市岩槻区の株式会社東玉の社員寮の青色の鉄の門の中に転がり込んだ。入ってすぐのところに果実を沢山実らせた大きな柿の木と柚子があり、その木々の後ろの薄いイエローの建物は、畳と茶色や緑の土壁の部屋がある1960年頃（だろうか）の典型的な日本の建造物だ。キッチンの壁には1990年のカレンダーがかけられ、食堂には厳しい寮生への規則が貼られ、数冊の古い本や雛人形の小道具が入った木箱やもう一度使われる時を待っているかのような人生ゲームがあり、少しタイムトラベルをしたような感覚があった。

この場所はかつて数十年ほど前には、雛人形等の人形製作と販売を行う株式会社東玉で働く人々が住み込んでいたという。今は、6人の国際的なアーティストのグループがここに暮らし制作する「Home」として、古い寮が新しい文化交流のためのプラットホームとなろうとしていた。どこから始めようかと議論している間に、ご近所の方が箱に入ったお赤飯を届けてくださった。この料理は特別なお祝いに食べるものだが、今回はHomeBase Project SAITAMAの始まりに対するご挨拶として持って来てくださった。これが、地域の人から頂いた数々の素晴らしいおもてなしのうちの最初の1つだった。

アーティストたちの到着と「Home」のはじまり

翌日、100円ショップと地元のスーパーとHomeBaseの間を何往復もしながら、部屋の準備と居心地の良い空間を作るために、ポット、フライパン、花、チェック柄のテーブルクロス、お菓子、ろうそく、黄色いメモ用紙、表札、石けん、スリッパ、4匹のネコが描かれたピンクの玄関マット、ガーデニンググッズ、手作りスープのための沢山の野菜など様々なものを買い込んだ。
アーティストが到着し始めた。ベルリンからエイドリアン・ブリュン、アテネからパリ・レガキス、さいたま市西区から飯島浩二、東京から三田村光土里と潘逸舟、そしてプロジェクト・コーディネーターとしてベルリンからニッキ・ヘンドリックスがやってきた。それぞれ部屋の鍵と封筒を受け取り、そしてハグを交わし、私たちはここで暮らすための準備を始めた。
土曜の朝はパンケーキの朝食を食べ、セージを焚いて清めの儀式で1日を始めた（セージの香りは家のなかの悪い魂を追いやる力を持つと知られている）。それから、私たちは一部屋ずつ回っていった。互いに「Home」にまつわる写真や作品のポートレート等を見せ合い、さいたま市に来るまでに考えたことや、心地良さや良い刺激をもたらす物を互いに共有しあった。

そのあと私たちは「ウェルカム・パーティー」を開催した。近隣の方やスタッフ、そのパートナー、この建物のオーナーをはじめとして、遠方からもご近所からも沢山の友人が集まってくれた。
私たちは小さな「植樹式」を行った。エルサレムと陸前高田、2つの遠いアーティスト・イン・レジデンスから花の種を持ってきて、庭の土に埋めた。そして、ゲストを各自の部屋に案内し私たちの自己紹介をした。リビングでは具だくさんのスープを振る舞い、イスラエルとギリシャと日本がミックスされた料理と、ゲストから差し入れられた一升瓶の日本酒はよく合った。この夜の会は文化的で創造的な3週間のプロセスの始まりだった。美をめぐる環境の中で、お互いを高め合うという希望を持ち、そして、社会における芸術の役割とは、個と公の間、自分と他者、そしてアートと日常の境界で揺れ動く存在であるということを考える機会であった。

HomeBaseのプログラムとその日常

車や徒歩でさいたま市を探索する忙しい週末を過ごした後、さいたま市大宮盆栽美術館と素晴らしい鰻料理のお店を訪ねた。私たちの家に戻ってから、もう一度7人でテーブルを囲んで集まった。各自が「家から持ってきたもの」を話し合うことにし、パリの母親が作ったマーマレードやギリシャのハーブ、イスラエルのお菓子やエルサレムの古い町で買ったキャンディー、作品のオリジナルや写真、絵、ステッカー、エキゾチックな紅茶の花やリサイクルショップで買った物たちを夜遅くまでテーブルの上に積み上げた。大切な物を交換したり共有することで笑顔になり、一夜にして見知らぬ者同士が家族に変わった。
HBのプログラムは、週に3回のアーティストトークと、「Home」に関連する内容のプレゼンテーションも行う夕食会があるという過密なスケジュールであった。飯島浩二は「さいたま市の伝統と現代の日常の儀式」、三田村光土里は「とても大切な物」、潘逸舟は「環境の要因」、パリ・レガキスは幻想の記憶と行動主義についての「家族の集合体」、エイドリアン・ブリュンは都市と家庭内にお

ける創造と破壊についての議論である「都会の構成」、私のプレゼンテーションはNY、ベルリン、エルサレム、そしてさいたまへ「旅する家」についてだった。加えて、プロジェクトディレクターである日沼禎子氏、ディレクターの芹沢高志氏、「さいたまスタディーズ」を担当するプロジェクトディレクターの三浦匡史氏といった、さいたまトリエンナーレチームからのレクチャーもあった。株式会社東玉の工房を訪問したり、オーナーのご自宅にお招きいただきご家族と一緒に夕食をごちそうになったり、岩槻映画祭の吉永篤志氏と齋藤淳氏にもトークゲストとしてお越しいただき、さいたまの地域映画として製作された「つきものがたり」の特別上映をしたり、鷹狩り行列と人形供養祭にも参加した。

この間、私たちの日々には発見と創造が満ちていた。神社、銭湯、公園、リサイクルショップ、自転車ツアー、日常の家事、庭での日光浴、互いの家族に会うこと、互いの趣味を教えてもらうことや通訳すること、コンピューターの前で時間を過ごす等、さまざまな出来事があった。これらすべてのことが重要なプロセスであり、「Home」とは何かについて、それぞれが批評的な視点を持ち、自己との葛藤とも向き合いながら、アーティストとしての表現へと急速に落とし込んでいったのだった。

アートにより変化した建物

３週間を終えて「家」は変化した。個々のアーティストたちの表現は互いに補完し合い、大きなひとつのプロジェクトとなった。

潘逸舟は、廊下に置かれた作品「あなたと私の間の重さ」で親密性について非常に簡潔に表現した。体重計の上に乗っている２人は、手を繋ぎ合うことでひとつの身体となり、ひとつの重さを持つことになる。大家族の構成と、アジアの文化的記号への深い考察は、彼の部屋を使った「大きな大きな円卓」と名付けられた作品に集約されている。キッチン用の白い計量器を大きな正円の形に並べ、その上にひとつひとつ異なるお茶碗とお箸を完璧なバランスで組み上げることで、互いが円を描いて繋がることや、部屋全体に配置された長い間伝わる伝統的な食卓の様に、穏やかな詩的な表現を用いながら、家族の分離への大きな不安が示されている。

三田村光土里は「小さな部屋」というタイトルで、「家」というものに対して誰もが抱くノスタルジックな感覚を表現したインスタレーション作品を制作した。

さいたま市の地図から切り出した小さな鳥、フラフープ、そして屋外の柿の木とをテグスで結びつけ、開け放たれた窓を通して内と外が繋れている。そして、他にもクリスタルのボールや黄色のレインコートなど、いくつか謎めいたものが木の枝に吊るされていた。部屋の中には、少し開いた箪笥、地方の風景が映る緑色の写真、人形の小道具、ほの暗いランプの光などがインスタレーションされている。そこではポール・マッカートニーの切ない歌「ウォーターフォールズ」の曲が絶え間なく繰り返し流れていた。これらの構成は、ある感情―思春期の憧れと不安とがもたらす、ある種の抑圧された感情―の風景を作り出している。

アナット・リトウィン ― 私のインスタレーションは「静物 / もののあはれ」と名付けた。日常生活の美しさと静けさの瞬間を捉え、畳の部屋との親和性によって構成しようとした。盆栽の様に刺激され、私は体を基礎としてカラフルなストローを使った微妙なバランスを取った彫刻作品を制作した。これらは家の中やキッチンで発見したさまざまな物の「内面的な接合」を視覚的に表し、浮遊するかのように配置した。冬の白い自然の光が満ちる中で、漆喰の壁を背景に裸足の足を伸ばすことで、重力をものともしない小さな宇宙、つまり安息の家を表している。印刷した写真と家の中で見つけた物の実物とを、階段の構築物（ささら）の一部の上に飾りつけたが、祭壇へのお供えのようにも見えた。

建物の２階には内向的で思慮が深い作品がならぶ一方、３階の作品は参加型で、家とコミュニティとの関係性のあり方について問う作品がそろった。

パリ・レガキスは、伝統的な雛人形の歴史と、今日の社会における意義に目を向けたリサーチベースのプロジェクトを行った。さいたま市岩槻区は人形づくりの街として知られ、産業、職人の伝統が続いている。人々の生活のなかで、そして文化の面で人形がどのような役割を果たすのかを調べ、文化大使としての視点があることを彼は見出した。

更に、彼は地元の人形産業の進化の一つとして、世界中に想いを届けることができる役割として「メッセンジャー・ドール」の制作を提案した、「さいたま市の人々はどんなメッセージを人形に託したいか、そしてその人形を誰に送りたいか？」という調査を行った。そしてこの度の成果として、株式会社東玉の社長・戸塚隆氏とその息子の戸塚大介氏へのインタビューを含む滞在中のリサーチを映像化し、自室での上映を行った。

飯島浩二は「スイートホーム」とは何か、そしてそれらの欠乏による暴力で満ちた世界の恐ろしさについて提示した。彼は自分の部屋を、完全に動物達の納屋に変えた。大きな剥製の熊、鷹、鹿、猪（埼玉県に生息する野生動物）が藁のなかに連なって、モーターの力によって狂ったように前後に動くように設置した。動物の近くに設置されたいくつかのメガホンから流れる声は、このHomeBaseで暮らす他のアーティストのものである。さまざまな言語で「どこ？私たちのスイートホームはどこ？」と必死に問いかける。音と震動で建物の基礎を揺らし、この部屋が家自体の心臓のようでもある。希望と現実、動物と人間、文化と自然との大きな隔たりとして立ちはだかり、けたたましい目覚まし時計のように警告を与えている。

エイドリアン・ブリュンは着物職人らが古い針を神社に持って行き、蒟蒻等に刺す日本の「針

供養」に刺激されて、‘AMORPHOPHALLUS KONNYAKU - 創造へのオマージュ’を作成した。この日本の儀式は「謙遜」が象徴されている。着物職人や針仕事をする女性達は自分の壊れた道具を埋めるというユニークな行動を通して、技術と作品の上達を祈った。彼は全く異なったこの儀式を発展させ、「自由な創造をたのしもう」いう新しい考えをもたらした。部屋に入るとすぐに蒟蒻の花の絵とタイトルが掲げてあり、絶え間なく炊かれているお香と中央の蒟蒻がサンクチュアリのようにも見えた。蒟蒻を乗せた固い木材は部屋のなかに着物の型のように幾何学上に並べられた。壁に並んだカラフルなマチ針を手にとって、インスピレーションのチャンネルをもっと開き、自信のなさを捨て、自由な発想でゼリー状の表面に好きなように刺すことでの参加を促した。制作の一部として部屋に拡大した蒟蒻の絵を飾ることで、その名前と花の形から、リビドーと官能的な存在を示している。参加の積み重ねを通して、創造神に対する何らかの鍼療法をしているようにみえた。更に、茶色の板の上がカラフルな点で満ち、製作途上にある抽象的な”完全な”作品にもみえた。
もうひとつのプロジェクトとして、彼は建物の正面に介入する作品を制作した。アスファルトの道に工業用の塗料でペイントされた路面の区画線や標識に焦点を当ててクローズアップ撮影したイメージを用いている。これらの写真は５枚の布製の旗にし、建物の正面に飾った。この抽象的な幾何学模様の旗は、郊外と街中を結び、「すべての道は＜ Home ＞に通ず」ということを鑑賞者に示したのではないだろうか。

オープン・ハウス

５日間のオープン・ハウスを通して、多くの来場者が、私たちの「Home」についての文章を読み、建物を見学し、三田村光土里の「アート＆ブレックファスト・デイ」で私たちと一緒に食事をし、作品を鑑賞し、アーティストの話を聞きながら座ってお茶を飲んだ。私たちの「Home」で子供からお年寄りまで、アートが好きな人や近隣の人だけでなく、それぞれ違う街から来た人々とともに時間を過ごし、文化の違いや言葉の壁を超え「つながり」が生まれたことが本当の嬉しいことだった。マイクロレジデンス・ネットワークフォーラム 2015 の最終日には、私たちの玄関に脱いだ靴が無数に並び、今は満員だということをはっきりと示していた。

HomeBase Project が旅を始めて 10 年になる。新しい大陸、新しい街に到着することは、さいたま市においての「Home」の意味を反映する機会でもあるだろう。過去を振り返ることは、未来に向かっていくこと、そして何より、地域の人々と共働し、空白だった心の部屋を「Home」として創造し、共有できたことは非常に貴重な機会であった。

アーティスト & HomeBase Project 創設ディレクター
アナット・リトウィン

All Roads Lead to Home

——Anat LITWIN
Artist & Founding Director, HomeBase Project

TLV to Saitama City

On October 29th I left my home in Tel Aviv, and took a long flight to Tokyo, changing flights in Istanbul and landing almost twenty hours later at Narita Airport. I spent the night at a local airport hotel, hoping my body will catch up with me, on time and space differences, shifting from Middle East to Far East over all that is in between.

I picked up some daikon soup from the seven-eleven shop down the street and sat down for dinner in my hotel room, soaking in sights, smells, sounds and tastes from this transitory station, thinking about the life I left behind at home, and the life awaiting ahead.

The following morning I catched the bus to Saitama City with three large suitcases on board. It took a two hour drive to this new destination, during which the views on the way turned into a dense urban-residential tapestry, patched green with agriculture. I rolled myself through the blue metal gate and into the Tougyoku Dormitory Building in the Iwatsuki-ku. Two large persimmon trees heavy with fruit, and a bright yuzu citrus tree stood in the front garden under winter skies. Behind them was a pale yellow three floor building, built somewhere in the 1960s in a typical Japanese architectural Tatami style with interior sanded plaster walls. Inside it felt a bit of a time travel, with a '1990 Calendar' hanging on the kitchen wall, strict house rules for the dormitory stayers written in Japanese, a few old books and boxes of doll parts on the wooden shelving and a old 'JINSEI' game (called in English 'The Checkered Game of Life') waiting to be played with once again.

The site has been used for the last few decades to host workers from the famous local Tougyoku company which produces and sells traditional handmade Hina dolls. It was now going to become a home for a group of six international and local artists who will be living and creating on-site, turning the old dormitory into a new platform for cultural exchange. While debating where to begin, a delivery arrived from the neighbors down the street: a box of red sticky rice with Azuki beans, called in Japanese Sekihan. In local tradition this dish symbolizes a special festive occasion, and in this case, it was a way to greet the arrival of HomeBase Project to Saitama – a gracious act of hospitality by the locals, first of many to come.

Arrival of Artists, Building a Home

The next day was spent going back and forth between the 100 yen shop, the local supermarket and our home, preparing the rooms and buying essentials for bringing some coziness to our temporary domestic domain: pots and pans, flowers, a checkered tablecloth, sweets, candles, yellow paper for notes, a welcome sign, party streamers, soaps and slippers, a pink welcome rug with four kittens for our entrance, garden equipment and lots of vegetables for a large homemade soup.

The artist started to arrive – Adrian Brun from Berlin, Paris Nefel from Athens, Koji Iijima from the Nishi-ku in Saitama, Midori Mitamura and Ishu Han from Tokyo, joined by project coordinator Nikki Hendrikx from Berlin. Each received a key to their room, an envelope, and a hug, and we started a process of settling in. Saturday morning started with a chopstick and pancake breakfast and with a cleansing ritual – burning sage scent which is known for its powers to exterminate any evil spirits existing in the house. We continued with a group tour of the building, each sharing a portrait photograph of home, images of our artwork, and the different thoughts and belongings that we carried with us all the way to Saitama.

Later that day we hosted a welcoming dinner party, inviting neighbors, staff members, partners, the building owner and friends from near and far. We celebrated with a small planting ceremony, placing flower seeds brought from two far away residency programs – Jerusalem and Rikuzentakata – in the soil of our garden, and invited visitors to our rooms to

introduce ourselves upon arrival. Homemade squash soup was served, along with a mix of Israeli, Greek and Japanese dishes which went down well with a grand bottle of Sake, brought in by our friends from Youkobo Art Space. The evening marked the beginning of a three weeks long communal-creative process. It expressed our hope of nourishing one another and our surrounding with beauty and meaning, considering the role of art in society as a catalyst for change while blurring the boundaries between private and public, self and other, art and everyday life.

HB Program & daily life

After a busy weekend of exploring Saitama by car and by foot, in rain and in sunshine, visiting the Omiya Bonsai Art Museum and an excellent eel restaurant, we finally gathered once again back at our home, this time just the core group of house residents - the seven of us around our table. Each brought from home a 'housewarming' offering to share with the others, and by the end of the night our table piled up: homemade marmalade that Paris's mom made, and herbs from the Greek islands, Israeli sweets and candles from the old city of Jerusalem, small original art works and photographs, drawings and stickers, exotic tea flowers and second hand store goods. It was as if a group of strangers turned overnight into a family, with exchanges and laughers to treasure.

The HB SAITAMA program unfolded with a full schedule of artists talks and dinners taking place three times a week, presenting a range of 'home' related topics: Koji on the 'Traditions and contemporary Life Rituals in Saitama', Midori on 'Critical Belongings', Paris on 'Family Constellations' – phantom memory and activism, Adrian on 'Urban Choreography' - discussing acts of creation and destruction in the domestic and urban spheres, Ishu on 'Environmental Ingredients' and my presentation on the 'A Journey Home' traveling with the HomeBase Project from NYC through Berlin to Jerusalem and now to Saitama. Other aspects of the program included lectures by the Triennale team: curator Teiko Hinuma, director Takashi Serizawa, and director of 'Saitama Studies' Tadashi Miura, a visit to the Tougyoku Factory and dinner at the house of our landlord with his family, a special screening of a locally made Saitama Movie with the Iwatsuki film festival members: Atsushi Yoshinaga & Jun Saito, and attending the Hawk Parade and the burning of the dolls ceremony.

In between, our days were filled with discovery and creation: shrines, bathhouse, parks, second hand stores, bike tours, studio visits, house chores, sitting in the sun in the garden, meeting each other's family members, learning each other's habits – good ones and bad, sharing time in front of our computers and translating. All these and more have incubated a deep process, through which we found a critical aspect of home which quickly turned into an artistic manifestation, while all along allowing our subconscious to collide.

Building transformed by Art

At the end of three weeks the house was transformed. The individual artistic expression's complemented one another, making the project as a whole larger than the sum of it's parts:

Ishu HAN reflected on the economy of intimacy in his work titled 'The weight between you and me' placed in the corridor – with an invite for two people to literally stand on a weights while holding hands, and by so instantly creating a joint body mass. Contemplating on larger family structures and Asian cultural codes, Ishu put together in his room a piece titled 'Great Round Table' in which a collection of different rice bowls and chopsticks were perfectly balanced on white kitchen measuring scales, connected to each other in a circle, gating up the entire room in a grand traditional dinner setting – revealing in a serene, poetic way, the heavy tension of family segregation.

Midori MITAMURA created an installation titled 'Tiny Room' that brought a haunting, nostalgic sense of home. Connecting the interior of her room with the outside through an open window, Midori stringed small paper birds cut out from a map of Saitama city, lined out through a hula hoop, and sent outwards to the Persimmon tree, where several other enigmatic objects were hanging on the branches, such as a crystal ball and a yellow rain coat. Inside the room Midori created an installation of old furniture displaying a cracked open closet, a green photo of the local landscape, doll parts, dim domestic lamps and lights. 'Waterfalls', a sentimental song by Paul McCartney played in the space in a constant loop. This assembly created an eerie emotional landscape, connected to longing and the anxiety of adolescents – emotions which are often suppressed in Japanese society, with a high rate of depression among teens.

Anat LITWIN – In my installation, titled 'Still life/mono no aware' I tried to capture moments of stillness and beauty in our daily life, composed within the intimacy of the Tatami room. Inspired by the display of Bonsai, I used my body as a pedestal to perform a delicate act of balancing. Using colorful straw sculptures which represent a visual form of 'inter-connectedness' along with various found objects from our kitchen and home, I created floating arrangements. With bare feet extended against the sand wall filled with natural white winter light, these compositions functioned as a mini cosmos defying gravity – a haven home. The printed photographs were displayed on a lumber stairway structure of the building, along with the found objects themselves, seeming as simple offerings in a shrine.

While the first floor of the building displayed more introverted reflective artworks the artwork on the upper floor somehow was more participatory in nature, challenging the boundaries of home into communal involvement:

Paris LEGAKIS created a project based on researching the history and the meaning of traditional Japanese Hina dolls in today's society. As Saitama is a city known for it's heritage of doll craftsmen and doll businesses, the inquiry into Hina dolls was viewed on a personal level – what role the dolls play in people's life – and on a cultural level – viewing the dolls as cultural ambassadors. Furthermore, a future chapter in the evolution of the local doll industry was suggested by Paris – the communal creation of a 'Messenger Doll' which can function to carry a message of change to the world – the pending question posed to locals was 'what is the message that the people of Saitama want to convey and to whom would they want it to be sent?' the outcome was a screening room in which a large video work was playing, capturing a conversation between the artist and the landlord Mr. Takashi Totsuka president of the Tougyoku company and owner of the site, and his son, Mr. Daisuke Totsuka of the Tougyoku company around these questions.
During the Open House Paris invited visitors to write their opinion for the 'Messenger Doll' project, and to mark on the world map, installed on the wall outside of the room, which destination they would chose for sending the doll.

Koji Iijima addressed the search for a 'Sweet Home' and the terrifying lack of such a thing, in a world filled with violence. He transformed his room into a complete animal house / barn, with a taxidermied bear, hawk, deer and boar (all typical to the local landscape), installed onto a heap of straw, frantically moving back and forth through the power of motors. A voiceover recording made by all the residents in the house came out-loud from several megaphones placed on top of the animals, desperately asking in a jumble of languages 'where, where is my sweet home?' The installation physically shook the infrastructure of the building with pulse and sound, and it was as if this room functioned as the engine of the house, confronting wide gaps between hopes and reality, animal and human, culture and nature, and serving as an alarming wake-up call.

Adrian BRUN's creative process was inspired by the ancient Japenese Hari Kuyo Ritual – meaning in English the Festival of Broken Needles, in which kimono makers bring their old broken needles to a shrine and burry them in a dish of konnyaku – a jelly-like organic substance made from a local flower called Amorphophallu's Konnyaku – 創造へのオマージュ . This Japanese ritual symbolizes modesty. The craftsmen and women ask through this unique act to bury their failures and broken tools, and improve their craft and skills to a level of complete mastery. Adrian expanded on this distinct ritual and took it to a new context, celebrating Creativity at large. The installation titled after the flower, reminded a set up of a sanctuary filled with an ongoing burning scent and a central stage. It included large geometrical slabs of konnyaku placed on heavy solid wood chunks in the center of the floor which were shaped according to kimono pattern parts. A range of colorful needles were placed along the wall with instructions for visitors to participate in the work by taking a colored

needle and placing it on the jelly surface with an intention of liberating creativity, releasing insecurity and opening more channels for inspiration. An enlarged image of the flower was placed in the room hinting to an erotic presence through its name and phallic form, acknowledging the libido and sensuality as an integral part and creative form. Through accumulated acts of participants which seemed as some kind of acupuncture to the creative gods, the organic brown slabs filled up with small colorful dots and became an abstract 'allover' work of art in progress.

An additional project Adrian created was an intervention on the facade of the building - hanging ten flags from the windows, with prints of enlarged photographs of the streets of Saitama, titled 'ce ne est pas un drapeau' meaning 'this is not a flag', a variation on Magritte 1966's famous painting "Ceci n'est pas une pipe", meaning 'this is not a pipe' in which the text is used as a meta message. The images included details of road infrastructure, zooming in on separation lines created to ensure trafic flow, capturing bold colorful industrial paint against the texture of asphalt. Apearing as a geometrical-urban abstraction, the flags created a new language of signals, linking our building with the outskirts of the city, hinting to a inherent existential flow: all the roads lead to home.

HB Project SAITAMA, Open House

Over the five day Open House event, the house filled with visitors and neighbors, who toured the building, read our letters home, had a meal with us at Midori's 'Art and Breakfast' event, saw our artwork, listened to our art talks and sat down with us for tea. We spent time hosting distinct city figures such as the mayor as well as young children and elders, art lovers and neighbors with a feeling of connection that surpassed cultural differences and language barriers. On the last day of the Microresidence Network Forum 2015 an endless trail of pairs of shoes left at the entrance to our house, a clear indication that we were at full capacity.

HomeBase Project has been traveling for almost a decade. Arriving to a new continent and a new city marked an opportunity to reflect on the notion of Home in Saitama City, looking back to the past and forward towards the future, but not less important was the rare opportunity to work together in present time, creating home in shared and empty rooms of the heart.

Anat Litwin,
Artist, Founding Director of the HomeBase Project

岩槻、株式会社東玉について

“人形のまち”岩槻

岩槻は、太田道灌公の岩槻城築城以来の城下町として、また江戸時代には日光御成街道の宿場町として、栄えてきた歴史をもつ町である。また、ここは全国有数の人形の生産地としても知られている。もともとこの付近は、上質の桐の生産地として知られ、人形作りに不可欠な胡粉の溶解と発色に適した水も豊富であったことなどから江戸期以来、人形作りが盛んに行われてきた。現在、岩槻では300軒余りの人形工房と100店の卸小売店舗がひしめいており、”人形のまち”岩槻ともよばれている。春には「流し雛」「雛めぐり」、夏には世界最大の雛段が登場する「岩槻まつり」、秋には人形塚の前で古い人形を荼毘に付し慈しんだ人形を供養する「人形供養」等、１年を通して人形に関連する催しが行われている。

“IWATSUKI” the doll’s town

Iwatsuki has flourished as a post town on the Nikko-onari highway since the time of Iwatsuki castle’s construction by Sir Doukan Oota. Iwatsuki is well known for having the best raw materials relative to doll making. This area was originally famous for predicting the finest paulownia wood powder used in doll making, in addition to paulownia wood, the abundance of high quality water found on Iwatsuki is essential in mixing white plaster of Paris as well as mixing and developing other colors for use in making dolls. Thus, doll making has been a flourishing practice in Iwatsuki since the Edo period. At present, there are about 300 doll workshops and 100 wholesale and retail stores, making it both in name and reality, one of the finest producers of traditional dolls in Japan. Iwatsuki celebrates different kinds of doll-related festivals throughout the year, in spring, “Nagashibina” which paper dolls floated downriver, in summer, “Iwatsuki Doll Town Festival” the world’s highest stairs for HINA doll and in autumn, “Memorial Service for Dolls” funerals for old dolls.

株式会社東玉

創業家の戸塚隆軒氏は嘉永年間の岩槻藩医であった。氏は人形作りが趣味で、時折人形を製作しながら、医者として働いていた。ある時出来上がった人形を岩槻城主に献上したところ、大いに褒められ「東王」の称号を与えられたが、恐れ多いと点を足し「東玉」としたことで現在の社名となっている。現在は６代目戸塚隆氏が引き継ぎ、今日に至る。

TOUGYOKU Doll Corporation

TOUGYOKU’s original founder, Ryuuken Totsuka, was a doctor at the palace of the lord of Iwatsuki, Kaei Nenkan, Totsuka’s hobby was dollmaking, and he often made fine dolls, in addition to his work as a doctor. When he gave one of his dolls to the lord of Iwatsuki as a gift, he was highly praised, and granted the moniker, “TOUGYOKU” meaning King of the East. Thus, the distinguished history of the TOUGYOKU name has been passed down through six generations, and remains active to this day.